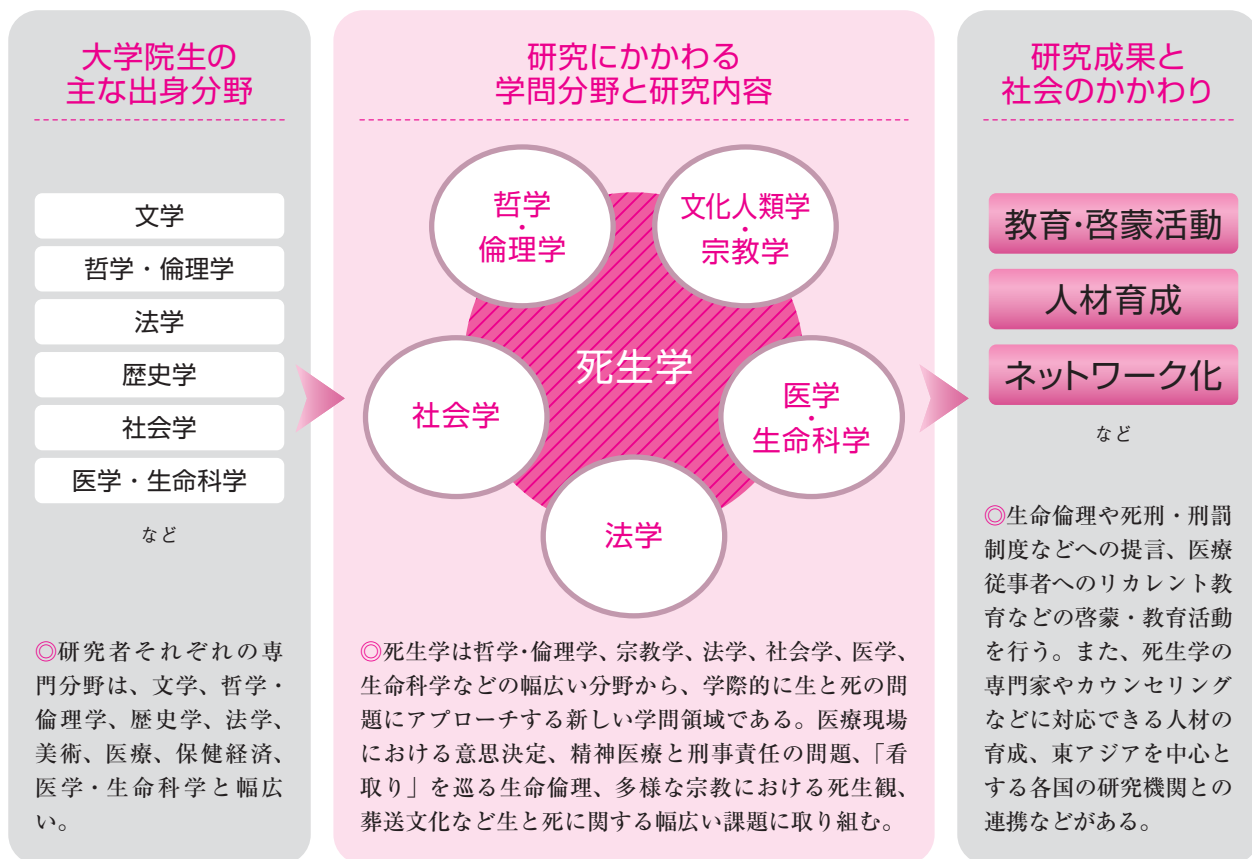


「生と死」にかかわる諸問題に 文理融合の視点からアプローチ

東京大大学院人文社会系研究科 一ノ瀬正樹研究室

臓器移植や体外受精などの生命倫理、死刑制度、原発事故と放射能、終末期患者のケアなど、人類は生と死にかかわる多くの課題を抱えている。特定の学問だけでは解決できない課題について、哲学・倫理学、宗教学、社会学、医学、生命科学などの幅広い学問分野の英知を結集して解決の方策を探る学問が「死生学」である。東京大の一ノ瀬正樹教授に、死生学と不可分の領域である哲学・倫理学の現状と、死生学のこれからについて聞いた。

フローチャートで分かる一ノ瀬研究室



深く観察できる洞察力が新たな思想へと導く

哲学・倫理学が求める学生像

誰もが当たり前と思っていることに疑問を持てる人

死生学の中でも、私の専門である哲学・倫理学では、人々が当たり前だと思っていることに疑問を投げ掛けることの出来る人が大成すると思います。例えば、私は小学生の頃、算数で「2分の1」と「4分の2」が「同じ」といわれることに、ものすごく抵抗を感じました。半分に割ったリンゴを一切れもらうのと、4分の1に切ったリンゴを二切れもらうのとでは、感覚が全く違うのではないかと思ったのです。算数・数学ではこの二つを同じことだと教えますが、私には簡単には受け入れられませんでした。

単に教えられた通りに答えを解いていくのではなく、本当にそうなのか深く考察できる感性や洞察力が、哲学・倫理学には必要です。民主主義は本当にベストの制度なのか、肉食は正しいことなのか……。当たり前だと思っていることに対して、ひょっとして違う考えもあるのではないかという疑いを持つことが、新たな思想への扉を開くのです。

高校生へのメッセージ 自分はどのような進路に進んだらよいのか、将来何をすべきなのかを見付けられずに悩んでいる高校生は多いと思います。自分で本を読んだり考えたりするのもよいですが、それではタイミングを逃してしまうこともあります。少しでも興味があることに対してはどんどん挑戦していく行動力も、時には必要ではないでしょうか。まずは行動してみましょう。そこから自分の適性や夢、生きがいが見付かることもあるのです。



一ノ瀬正樹 教授 Ichinose Masaki

東京大学大学院人文社会科学系研究科教授。グローバルCOEプログラム拠点リーダー。東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。東洋大助教授、東京大助教授、オックスフォード大客員研究員などを経て、現職。博士（文学）。第10回和辻哲郎文化賞、第6回中村元賞を受賞。主な著書に『死の所有―死刑・殺人・動物利用に向きあう哲学』（東京大学出版会）、『確率と曖昧性の哲学』（岩波書店）などがある。

研究を志したきっかけ

死刑への疑問から 哲学、そして 因果性の問題へ

哲学に関心を
持ったきっかけは、
中学校時代に抱い
た死刑制度への疑
問でした。死刑
判決は遺族にとつ
て一つの区切りに
なると思いますが、

家族を失った悲しみが癒えるわけ
はありません。それなのに、死刑に
よって事件が解決されたと思なされ
るのはなぜなのか、死刑によって社
会が変わったり良くなったりの
だろうか、死刑や刑罰のニュース
に接するたびに不思議に思いました。
この疑問を抱えたまま、東京大の
哲学科に進んで学ぶうちに、多くの
国の刑罰制度が悪の報いによって罰
を受ける「因果応報」の思想に基づ
いていることが分かってきました。
私はやがて、原因と結果の関係を探
る因果性の問題を追究するようにな
り、社会現象や科学哲学などの分野
へと関心の幅を広げていきました。
大学院時代は物理学にも目を向け、
科学的文脈における原因・結果の追
究を進めました。また、哲学書を原
書で徹底的に読みました。哲学研究

研究概要

哲学は現実問題に アプローチしてその 存在意義がある

哲学には、明確
な研究対象はあり
ません。考えるこ
と、問いを突き詰
めることを訓練す
る学問といえます。
事実、哲学で評価
される論文は、社

会の諸問題に対して具体的解答を提
起するものではなく、誰も気付いて
いないところに明確にすべき問題が
あることを指摘する論文です。具体
的解答も必要ですが、問題を提起す
ること自体にも意味があるのです。

ただ、日本の哲学の歴史は150
年と浅く、これまではカントやデカ
ルトなど特定の哲学者の文献の紹介
や分析が中心でした。そのため、日
本の哲学者は、現実社会の問題に対
してなかなか問題提起をすることが
出来ないという側面があります。た
だし、文献を読むことで思想の中立
性を保ち、自分の考えや日本人の文



写真 研究室に並ぶ哲学書の数々。原書講読は哲学者の思想にダイレクトに迫る最善の方法である

化や思想を相対化した上で持論を展開することは大切だ。

例えば、福島第一原発の事故に関して、私は専門である因果性の側面から、被曝の影響が分かりにくい低線量被曝とガンの発症や死亡との関係を論じました。被曝と病気の因果関係が明確ではない数ミシーベルトの放射能を浴びた場合、国や電力会社はどのような対応をすべきか、複数のパターンを示し、法令制定の基準や因果関係の認定の方法、国や電力会社による補償のあり方などについてまとめました。これは慎重に論じるべき問題であり、さまざまな批判を受けるのは覚悟の上で提言をしました。歴史上の哲学者も、その時々

の現実に向き合いながら根底に宿る問題を暴き出そうと格闘してきました。日本の哲学者もそうあるべきです。我々の教育のゴールも、膨大な知識を背景に問題提起の出来る人材の育成にあると考えています。

現在の研究テーマ

最終目標は死生学として固有の学問と確立させること

グローバルCOEの研究テーマ「死生学の展開と組織化」への貢献も、哲学研究室に課された使命です。死生学は、アメリカではThanatology（死学）、イギリスではDeath Studiesと言いますが、私たちはDeath and Life Studiesと名付けました。Lifeの観点を加えたのは他にはない特徴です。

死生学では死生観の研究やターミナルケア、葬送の歴史的・文化的研究、死に関する教育などが行われています。私たちは生命科学や動物倫理などにも対象を広げ、生と死のかかわりを多角的に研究しています。例えば、死刑問題や刑罰論は従来の死生学ではあまり扱わないテーマですが、私たちは精神障がい者の刑事

責任について、脳科学や心理学などの知見も交えて活発に議論を進めています。また、アニマルセラピーや介護犬などにかかわる動物倫理も取り上げています。イルカとの触れ合いは自閉症の治療に効果があることが明らかになっていますが、それがイルカにはストレスにならないのか、効果を数値化しにくいアニマルセラピーを医療にどう位置付けるのか、議論を重ねています。

将来的には、死生学を学んだ人が社会で活躍できる領域を広げること目標の一つです。心理学を学んだカウンセラーなどが対応する「いのちの電話」、宗教家が定期的に行う死刑囚との面談などにも、哲学・倫理学や生命科学などの知見を備えた死生学の専門家が携わることで違うアプローチが出来るでしょう。

そして最終的には、死生学を学問分野として確立することが我々の目標です。単なる共同研究やデータの蓄積に終わらせず、死生学としての固有の探究方法を見付け、海外とのネットワークを通じて、西洋と一線を画す東アジアならではの死生学を確立することを目指しています。

用語解説

1 因果性
原因と結果の関係のこと。事実に対して適用される場合と、責任を問うような人為的文脈で適用される場合とがある。

2 低線量被曝
自然放射線による被曝は世界平均で年間2.4ミシーベルト、一般人が日常生活や医療目的以外でさらされる放射線の限度は年間1ミシーベルトである。低いレベルの放射線を浴びた際に人体にどのような影響が現れるのかは、人によってさまざまであり、福島第一原発の事故以来、活発に議論されている。

3 アニマルセラピー
動物との触れ合いを通して、情緒の安定や生活の充実感を得る活動。あるいは医療現場において動物を介在させる医療方法のこと。イルカ療法、乗馬療法などの他、病院や高齢者施設におけるレクリエーション活動などがあ

4 「正義論」
アメリカの哲学者ジョン・ロールズが1971年に著した政治哲学書。ルソーやカントなどの社会契約の伝統的理論を基に、功利主義に代わる公正の正義を財の分配という観点を中心に説いている。

「死者の危害」を論理的に追究



福間 聡さん
Fukuma Satoshi

東京大大学院人文社会系研究科附属
死生学・応用倫理センター特任研究員
(秋田県立大館鳳鳴高校卒業)

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 学部時代は明治大で法律を学んでいました。そこで、法律にはさまざまな解釈があり、根源には哲学や倫理学があることに気がつき、法律を道徳的・哲学的に考えたと思うようになりました。明治大では社会思想史のゼミで学び、卒業後は東北大大学院哲学研究科に進んで、本格的に哲学・倫理学を学び始めました。

博士課程修了後、日本学術振興会

の特別研究員になった縁で東京大の先生と知り合い、グローバルCOEの公募に応募して死生学について研究を始めました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 最初の研究では、アメリカの哲学者ジョン・ロールズの『正義論』を基に、経済格差が人々の健康格差にも影響するという「社会疫学」をテーマにしました。日本には国民皆保険制度があり、誰でも医療を受けられますが、貧しい人の方が所得の多い人より寿命が短く、病気になるかかやすいことが明らかになっていきます。人々の健康格差をなくすには、ロールズが唱える「正義」が社会で実現されることが必要であるという仮説を立て、理論的な研究を行いました。

現在は、「死者は危害を受けるのか」というテーマに取り組んでいます。死者への悪口が名誉棄損に当たるとしたら、遺族が危害を受けるから罪なのか、死者も危害を受けているからなのか。また、2009年に臓器移植法が改正され、10年から家族の同意だけで脳死状態での臓器移

植が可能になりましたが、本人は望んでいなくても家族が同意して臓器が摘出された場合、本人は危害を受けたことになるのか。私の考えでは、危害は経験的なものなので死者が受けることはないが、悪は被り得るという立場で、死者の危害について論理的に説明しようとしています。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 高校時代は、出来るだけたくさんの本や漫画を読み、映画やドラマを見ることをお勧めします。世の中には自分の考えと違う意見がある、自分とは違う考えを持つ人がいるということに気付く、その人を理解しようとする姿勢は、これからの時代において特に大切な

だと思います。小説や映画には作りの主義・主張や思想、テーマが込められており、それらに接することによって異なる意見を知るきっかけになると思います。

私は高校時代、大学入試対策のために読んだ本で社会思想に興味を持ち、大学のゼミで哲学を学ぶきっかけを得ました。「受験のために」と思うと敬遠しがちかもしれませんが、国語の教科書や小論文の試験で出題される文章からでも新しい書籍や思想に出会い、知識や関心が広がっていくこともあります。受験勉強の中にも人生を左右する出会いがあることに気付くことが出来れば、より一層学びに主体的に取り組めるようになると思います。

私の高校時代

真理追究への道は平坦ではないと気付いた

●高校時代は山岳部で活動しました。顧問の先生が頂上での感動を力説されているのを聞き、入部しました。実際の登山は苦難の連続でしたが、山頂に到達した時の達成感、爽快感は先生から聞いた通りでした。大雪山での沢登り、槍ヶ岳頂上からの眺望など、苦しかったからこそ得られる感動を心ゆくまで味わいました。

哲学書を読んでいると登山を思い出します。登山は上りばかりではなく、上り下りを繰り返しながら少しずつ頂上に近づいていきます。哲学の理解もこれと似ていて、分かったと思うとすぐに分からなくなることがあります。分からなくなっていくながら哲学書を読み進めるうちに、これまで見えなかった景色がぱっと開ける。その快感はまさに登山と同じです。険しい道も、諦めずに上を目指して続けることで高みに達する。そうした期待や希望が、研究の励みになっています。